

## 1. はじめに

平成 28・29 年度に発掘調査を実施した市内堀越地内の「砂田遺跡」、寺社地内の「山本遺跡」について、昨年 8 月から発掘調査報告書を作成するための資料整理を行ってきました。

このたび資料整理がほぼ完了しましたので、その成果についてご報告するとともに、遺跡から見つかった興味深い穴についてご紹介します。なお、今回のたよりでは、砂田遺跡を中心にお話しします。詳しい成果は平成 31 年度に刊行予定の報告書をご覧ください。

## 2. 資料整理の成果

砂田遺跡は堀越集落の南東に位置する、平安時代（約 1,000 年前）と鎌倉・室町時代（約 700 年前）を主体とする遺跡です。小里川と県道の改修に伴い発掘調査が実施されました（発掘調査の詳細は、平成 29 年度「砂田遺跡発掘調査だより」をご覧ください）。

平安時代では、土師器碗（はじきわん）と呼ばれる素焼きのうつわがたくさん見つかりました。地面に掘った大きな穴の中からまとまって見つかることから、使ったうつわをまとめて捨てた場所であると思われます。この時期は穢れ（けがれ）を忌み嫌う風習があり、一度用いたうつわなどの食器は、すぐに捨てていました。もったいないように感じますが、現代にも続いたらわしのひとつだと言えるでしょう。残念ながら、うつわを用いた人びとの暮らしのようすはわかりませんでした。建物跡などが見つからなかったためです。おそらく、今回調査を行った付近の別な場所に集落があったものと考えられます。

鎌倉・室町時代になると出土物が少なくなります。一方で、炭や焼けた骨をたくさん含んでいる縦 1m・横 60cm ほどの穴が 5 か所で見つかりました。穴の形は「中」の字をしたもの、長方形のものなどがあります。骨について、新潟医療福祉大の奈良貴史教授に調べていただきました。その結果、800℃以上の高温で長時間焼かれた人の骨であることがわかりました。穴は、亡くなった人を火葬するための穴（火葬土坑）だったのです。また、おおよそ 700～600 年前に焼かれたことがわかりました。ちょうどそのころ、砂田遺跡の近くには堀越館がありました。堀越館は、上杉家に関わる争乱によって応永 30（1423）年に落城した記録が残っています（新潟県 1983）。資料整理では、堀越館との関係を示すものは見つかりませんでした。関連する葬送の場であった可能性が考えられます。



第 1 図 遺跡と周辺遺跡の位置

### 3. 火葬土坑からわかること

火葬土坑から出土した骨の量は8～250gほどです。これは、成人の焼骨（男性2,000g、女性1,300g）の1～19%ほどの量にすぎません。現代人である私たちの感覚では、お骨を拾ったのだから、そのくらいしか残らないのが当たり前だと思ってしまいます。ところが、もっとも多くの焼骨が残っていた火葬土坑204（第2・3図）には、頭蓋骨など大切な部位の骨がたくさん残っていたのです。死者に対する、現代人と鎌倉・室町時代の人びととの感覚の違いが表れているのかもしれない。

資料整理の中では、このような火葬土坑が市内の遺跡でたくさん見つかったことがわかりました。市内ではこれまで7遺跡50基（水原：6遺跡38基、京ヶ瀬：1遺跡12基）もの火葬に関わる土坑が発見されており、新潟県内では、もっとも多く発見されている地域であると言えます。

これらの穴の形は、砂田遺跡のような形のものもありますが、違うものもあります。また、焼骨をたくさん含むもの、炭しか残っていないものなど、様々な特徴が見られます。おそらく、火葬から墓への納骨・儀式など一連の葬送過程で使い分けられたためでしょう。砂田遺跡の火葬土坑471（第4・5図）では、骨をわずかしかなかった代わりに、刀子（小さな刀）・銭貨（古いお金）が出土しています。この穴は火葬の後に、少しの骨とともに無事に三途の川を渡ってもらいたいという願いが込められた埋葬のための墓であることも想像できます。

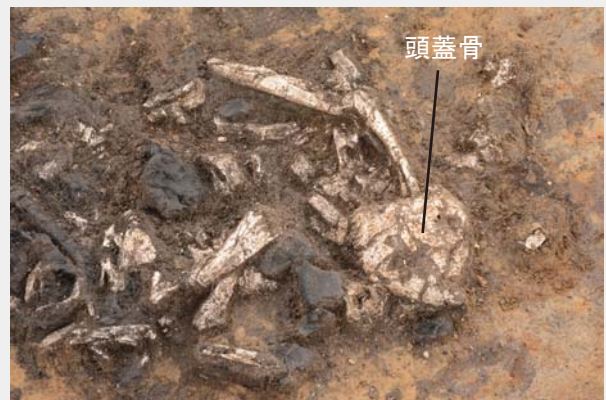
今後、これらの違いを明らかにすることで、当時の葬送過程を復元することが可能になると思います。

#### 【参考文献】

新潟県 1983 『新潟県史 資料編4 中世Ⅱ 文書編2』



第2図 火葬土坑 204



第3図 頭蓋骨が残っているようす



第4図 火葬土坑 471



第5図 刀子・銭貨の出土したようす